
空境線

姫響

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空境線

【Nコード】

N6228P

【作者名】

姫響

【あらすじ】

世界に意味なんてない

prologue

夢を見ているんだろうか。

体が鉛のように重い。

腕が上がらない。

全身が痛くてたまらない。

ただ、唯一自由の効く目は、残酷にも少年に人が首を撥ねられる瞬間を目撃させた。

見たくない。

やめてくれ。

そう叫ぼうとしたが、掠れた声が出ただけだった。

こちらへと迫ってくる残虐な人物。

恐怖に煽られながら、少年は体の痛みの理由の記憶を手繰る。

なぜ、自分はこんなところにいる？

なぜ、全身が傷だらけなんだ？

目の前にいる人物はなんだ？

隣に倒れているのは——誰だ？

少年の心を読んだかのように、隣に倒れていた人物がゴロリと転がされ、顔が露になった。

驚いたように見開かれた瞳は、少年を映しているようで何も映してはいない。

死者の瞳。

金色の長く美しい髪は血で染まり、美しかった顔は無惨窮まりなく血で汚れ果てていた。

「あ…」

声にならない声をあげ、少年は軋む腕をできるだけ伸ばし、隣の人物に触れた。

冷たい体。

それは、少年にその人物が絶命していることを認識させるに十分だった。

「ああああああああああっ！！」

頭でそれを理解した瞬間、少年は咆哮にも似た叫び声をあげ、軋む

体を見捨てて近くに落ちていた刀を拾い、残酷な人物に突進していった。

赤い夕焼けを背景に、深紅の血が舞い散った。

第一章

この街はいつだって退屈で残酷だ。

いつもの荷物運びの仕事をしながらボクは思う。

ガッチャン！

「てめー、こんな簡単なことも出来ねーのか！！」

荷物を落とした同僚が責任者に叱られて困ったように頭をかく。

頭でも下げようとしたのか屈むような体勢になった同僚は腹を容赦無く蹴飛ばされた。

そんな重いもの、持てるわけがないじゃないか。

同僚の落とした、身丈の倍はあろつかという物体を見て、ボクはため息をついた。

あの人はもうクビだろう。

次はきつとボクに回って来る。

あの、クビ専用運搬物が。

自分のネーミングセンスのなさに失笑しながら、ボクは責任者が近づいてくるのをぼんやり見ていた。

「おい、お前!!」

「はい」

「あの荷物を運べ!!
落としたら承知しないからな」

…ほら、きた。

一応、言い付けられた荷物の前に立ってはみたが、絶対持てそうに
もない。

「すみません、無理です」

ニツコリ笑って話し掛けたが、逆にカンに障ったようだ。

見る見る内に、顔が真っ赤に染まった。

「お、お前は雇われてる分際で……」

あーあ。

殴られるか蹴り飛ばされるなあ、これ。

俯いて来る痛みにも備えたが、なぜか辺りはしんと静まり返った。

不思議に思って顔を上げる。

「！！！」

目に見えたのは、さっき蹴り飛ばされた同僚がにこやかに責任者に刀を突き付けている、異様な光景だった。

「すみませーん、さっき蹴り飛ばされたから腹痛くて帰らせてもらえませんか」

けだるそうに言い放つ。

「き、貴様！！」

それが人に物を頼む態度か！？
拾ってやったあげくに居場所まで与えてやったのに、この恩知らずが」

「拾ってやったって…」。

別にあんたに雇われなくても俺は生きていけるんで
エラーソーに言わないでくれますかね、万年糖尿」

「まっ万年…!？」

「あーあ、働くのもいいなと思ったが、興ざめだ。今日限りで辞める」

「なっ…!!？」

「あと、あんた責任者解任な。
ろくな仕事してないから」

「何故お前ごときにそんなことまで…!」

憤慨して先程に輪をかけて更に顔を真っ赤にする責任者に、少年は何かを突き付けた。

「ほら。」

俺実は国の上位管理職だったわけ。
ここの経営が悪いって聞いたから潜り込んでみれば、この有様。
上位管理職の顔すら知らないときた。
さっき俺の腹蹴飛ばしたし解任は妥当だろ？」

一言私情が入った説明をしながら少年が見せびらかすそれは、銀の縁の翡翠のブローチだ。

「それは…!!！」

「お、これは知ってたみたいだな」

シヤラシヤラと鎖を鳴らしながら言葉を続ける。

「王国の紋章が中に複雑に入り込められた特別な作りのペンダント。到底、あんたが蹴り飛ばしていいような爵位の人物じゃないな」

いたずらな笑顔で刀を鳴らす。

「ひっ……」

チャキ、と金属音が響き、責任者の悲鳴が続いた。

「ってことで、帰りまーす」

すっと刀を外して、少年が明るく言った。

「どどど、どつぞどつぞー!」

吃りながら半ば叫ぶように言う責任者に、満足げに頷きながら少年は「ん」と手を出した。

「……?」

疑問符を浮かべる責任者に、少年が言う。

「管理証明書だよ。」

ここの総管理職解任するから、あんた」

「え、いや、しかしですね…」

この期に及んでまだ言い訳しようとする責任者に、少年は笑顔のまま無言でチャキリと刀を鳴らした。

「は、はい、ただいま!!」

たちまち、責任者は顔を真っ青にして管理証明書を持ってきた。

少年はそれを容赦なく破り捨て、仕上げと言わんばかりにグシグシと踏み付ける。

「じゃあ、このことは報告しておくから。
近いうち監査官がくるだろ。」

新しい責任者もその時着任させる」

至極真面目な顔で伝えると、少年は出口に向かって歩いていった。

一部始終を見ていたボクは、なんとなくあの人についていった。

「なんだ、お前？」

不思議そうに首を傾げて尋ねられ、言葉に詰まる。

「あ、えっと…。」

ボクはシフォン・ヤーハです」

とりあえず名乗ってみる。

「シフォン？」

ケーキみたいな名前だな」

「…はあ。よく言われます」

結構失礼なことをサラっと言われて対応に困る。

声音にはからかいなどの感情は含まれておらず、純粹に思ったことを口に出しただけらしい。

第一章

この街はいつだって退屈で残酷だ。

いつもの荷物運びの仕事をしながらボクは思う。

ガッチャン！

「てめー、こんな簡単なことも出来ねーのか！！」

荷物を落とした同僚が責任者に叱られて困ったように頭をかく。

頭でも下げようとしたのか屈むような体勢になった同僚は腹を容赦無く蹴飛ばされた。

そんな重いもの、持てるわけがないじゃないか。

同僚の落とした、身丈の倍はあろつかという物体を見て、ボクはため息をついた。

あの人はもうクビだろう。

次はきつとボクに回って来る。

あの、クビ専用運搬物が。

自分のネーミングセンスのなさに失笑しながら、ボクは責任者が近づいてくるのをぼんやり見ていた。

「おい、お前!!」

「はい」

「あの荷物を運べ!!
落としたら承知しないからな」

…ほら、きた。

一応、言い付けられた荷物の前に立ってはみたが、絶対持てそうに
もない。

「すみません、無理です」

ニツコリ笑って話し掛けたが、逆にカンに障ったようだ。

見る見る内に、顔が真っ赤に染まった。

「お、お前は雇われてる分際で……」

あーあ。

殴られるか蹴り飛ばされるなあ、これ。

俯いて来る痛みにも備えたが、なぜか辺りはしんと静まり返った。

不思議に思って顔を上げる。

「！！！」

目に見えたのは、さっき蹴り飛ばされた同僚がにこやかに責任者に刀を突き付けている、異様な光景だった。

「すみませーん、さっき蹴り飛ばされたから腹痛くて帰らせてもらえませんか」

けだるそうに言い放つ。

「き、貴様！！」

それが人に物を頼む態度か！？
拾ってやったあげくに居場所まで与えてやったのに、この恩知らずが」

「拾ってやったって…」。

別にあんたに雇われなくても俺は生きていけるんで
エラーに言わないでくれますかね、万年糖尿」

「まっ万年…!？」

「あーあ、働くのもいいなと思ったが、興ざめだ。今日限りで辞める」

「なっ…!!？」

「あと、あんた責任者解任な。
ろくな仕事してないから」

「何故お前ごときにそんなことまで…!」

憤慨して先程に輪をかけて更に顔を真っ赤にする責任者に、少年は何かを突き付けた。

「ほら。」

俺実は国の上位管理職だったわけ。
ここの経営が悪いって聞いたから潜り込んでみれば、この有様。
上位管理職の顔すら知らないときた。
さっき俺の腹蹴飛ばしたし解任は妥当だろ？」

一言私情が入った説明をしながら少年が見せびらかすそれは、銀の縁の翡翠のブローチだ。

「それは…!!」

「お、これは知ってたみたいだな」

シヤラシヤラと鎖を鳴らしながら言葉を続ける。

「王国の紋章が中に複雑に入り込められた特別な作りのペンダント。到底、あんたが蹴り飛ばしていいような爵位の人物じゃないな」

いたずらな笑顔で刀を鳴らす。

「ひっ……」

チャキ、と金属音が響き、責任者の悲鳴が続いた。

「ってことで、帰りまーす」

すっと刀を外して、少年が明るく言った。

「どどどど、どつぞどつぞ……!」

吃りながら半ば叫ぶように言う責任者に、満足げに頷きながら少年は「ん」と手を出した。

「……?」

疑問符を浮かべる責任者に、少年が言う。

「管理証明書だよ。」

ここの総管理職解任するから、あんた」

「え、いや、しかしですね…」

この期に及んでまだ言い訳しようとする責任者に、少年は笑顔のまま無言でチャキリと刀を鳴らした。

「は、はい、ただいま…!」

たちまち、責任者は顔を真っ青にして管理証明書を持ってきた。

少年はそれを容赦なく破り捨て、仕上げと言わんばかりにグシグシと踏み付ける。

「じゃあ、このことは報告しておくから。
近いうち監査官がくるだろ。」

新しい責任者もその時着任させる」

至極真面目な顔で伝えると、少年は出口に向かって歩いていった。

一部始終を見ていたボクは、なんとなくあの人についていった。

「なんだ、お前？」

不思議そうに首を傾げて尋ねられ、言葉に詰まる。

「あ、えっと…。」

ボクはシフォン・ヤーハです」

とりあえず名乗ってみる。

「シフォン？」

ケーキみたいな名前だな」

「…はあ。よく言われます」

結構失礼なことをサラっと言われて対応に困る。

声音にはからかいなどの感情は含まれておらず、純粹に思ったことを口に出しただけらしい。

「で、俺に何か用か？」

「あ…いえ、何となくついて来ただけですけど…」

「なんだよ、それ」

苦笑しながら男は頭を掻いた。

そして、ふと何かを思い出したように問いかけてきた。

「そっぴやさ、お前あそこで働いてるけど、どうするよ？」

「え…何がですか？」

「続けてあそこで働くかって聞いてんだよ」

「…それは…」

正直、もうあそこには戻りたいとは思わない、というか、戻りたくない。

考え込むボクを見て、男は、新しい責任者は信頼の置ける人物に着任させると言ったが、そういう問題だけではない。

要は、仕事場の雰囲気、労働者との間柄がボクにとっては悪いのだ。

ボクは実は、余所の大陸から流れ着いた流れ者であり、この国の民じゃない。

厳しい労働でストレスが溜まりに溜まった人々のそのはけ口にされるには、十分すぎる要素をボクは持っている。

髪の色、目の色、顔のつくりから、職場でかなりのけ者扱いされていたりする。

「ボクは…出来れば、職場には戻りたくない…です」

だから、正直にそう伝えた。

「そうか」

少しだけ、良い返答が返ってくることを期待したが、男はそれだけ言って身を翻す。

「え、あの、ちょっと」

「ん？」

思わず引き止めてしまったが、別に何も言うことがなくてボクは言葉に詰まった。

何か言わなくては、と口を開くも、それは唐突な男の言葉に遮られてしまう。

「来るか？」

「え？」

「俺と一緒にセントラルの下町に来るか？って聞いてんの」

いや、そんな物分かり悪いなって顔されても、主語がなきゃわかりませんで。

「行ってもいいんですか？」

「ああ、別に俺は構わねえよ。むしろ帰りに話し相手が出来て歓迎さ」

子供のように無邪気な笑顔を浮かべてそういう男は、なんとなく昔いたボクの大事な人に似ている気がした。もともと、平民の出であり、貧困生活とまではいかないが、苦しい生活を余儀なくされたボク以外の労働者には、連帯感と仲間意識が強い。

しかし、ボクは余所から流れてきた流れ者、つまりはよそ者だ。

仕事で溜まったストレスのはけ口にと、疎外物として扱われている。

あの責任者がいなくなったからといって、ボクのその立場が変わることは未来永劫、ないだろう。

悶々と考えてしまったために、男が少し遠慮がちに聞いてきた。

「あー…。なんか、まずいこと聞いた、俺？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6228p/>

空境線

2011年10月7日10時33分発行